

中世初頭の東国の 京都系かわらけにみる 技術の導入と変容

Introduction and Transformation of Advanced Technology :
A Case Study of Unglazed Kyoto-style Earthenware Produced in
Eastern Japan at the Beginning of the Medieval Period

池谷初恵

IKEYA Hatsue

はじめに

①中世初頭の京都系かわらけの研究

②分析対象の遺構

③東国の京都系かわらけの成・整形技法の特徴

まとめにかえて

【論文要旨】

本稿では、12～13世紀に京都の影響を受けて地方で作られた、いわゆる京都系かわらけについて、成・整形技法の視点から分析を行い、京都系かわらけの東国への導入と変容について検討する。分析にあたっては、平泉・鎌倉・韮山の4遺跡、7基の井戸および井戸状遺構に廃棄された京都系かわらけを含む一括資料を対象とした。これらを遺構ごとに成・整形技法の特徴を抽出し、数量的な傾向をみることにより、共通点や差異を導き出し、京都の成・整形技法と比較を行った。

たとえば、口径の比較では、同時期の京都系かわらけであっても、地域間で最大1.5cmほど差が生じており、京都産かわらけとも必ずしも一致していない。また、京都産かわらけではみられないナデ調整の工具が使われたり、口縁部のナデ調整が逆方向に行われる例もある。

このように、それぞれの地域において京都の技法とは異なるものがみられ、また地域間にも成・整形技法の違いがあることから、東国への系統的な技術の伝播・伝承が行われていた状況を想定することはむずかしい。京都系かわらけの導入にあたっては、在地の土器製作者が見聞きした京都産かわらけの技法に学びつつも、これまでの製作方法を応用して模倣形を製作したと考えられる。

【キーワード】 京都系かわらけ、京都、東国、技術、伝播、武家儀礼

はじめに

京都系かわらけとは京都の影響を受けて地方で作られたかわらけで、伝統的にロクロ成形で土器作りを行っていた地域において、手づくねで成形することに特徴がある。古代末から中世にかけて全国的にみられるが、とくに東国においては中世初頭の12世紀後半から13世紀前半にかけてと、16世紀後半の戦国期との2度の大きな波となって広がりをみせた。この2つの時期は中世のはじまりと終わりの時代の変革期に相当するため、社会史・文化史の変化、とくに武士の儀礼に大きな変化が生じ、土器作りにも影響を及ぼしたと考えられている〔藤原 1997〕。

1990年代後半から2000年代はじめにかけて、中世土器研究では京都系かわらけをめぐる議論が活発に行われた〔日本中世土器研究会 1998〕。その後、10年余りの年月が経過し、京都系かわらけを「受容」した各地において発掘調査が進み資料も増加した。とくに、かわらけの遺構一括資料が増加し、量的な検討が可能となり、共伴する陶磁器等から年代観の修正も行われている。

本稿では、2000年代以降に資料が増加した平泉・鎌倉・葦山における京都系かわらけについて、成・整形技法の視点から分析を行い、京都系かわらけの東国への導入と変容について検討する。

①……………中世初頭の京都系かわらけの研究

東国において最初に中世都市の発掘調査が進められた鎌倉においては、その初期段階から東国の系統的な技法であるロクロ成形ではない手づくね成形かわらけが注目され、同じく中世遺跡の調査が進行し資料が蓄積されつつあった京都にその系譜を求めている。たとえば、河野真知郎は「12世紀最終末か13世紀初頭に京都から手づくねかわらけを学んだものと思われる。胎土・焼成などは鎌倉方面のものと見て良いので、生産は根づいたものと思われる」としている〔河野 1986〕。

齋木秀雄は「直接京都から来たのではなく、京都以外で少し変化したものが、鎌倉に来たのではないか」と推測している〔齋木 1983〕。服部実喜も「内型成形（手づくね）の一群は、平安京周辺における土師器生産の影響を受けて成立（出現）したものと思われる」とするが、東国の一部の地域でも同様のものが見られることから、系統性については結論を保留している〔服部 1985〕。3氏とも鎌倉における京都系手づくねかわらけの出現を12世紀末～13世紀前半とし、その契機は源頼朝による幕府創立と都市鎌倉の成立にもとめている。

いっぽう、馬淵和雄は「鎌倉における非ロクロ種（手づくねかわらけ）は、平安京のそれと区別しがたい器形・技法をもつものの出現から始まる」とし、その時期は「東国の他の例（具体的には平泉）と同様、12世紀第3期ごろまでさかのぼらせても不都合はない」とする〔馬淵 1998〕。

以上は手づくね成形という東国では異質な成形法を京都に系譜をもとめるもので、京都産かわらけとの詳細な比較は行われていなかった。これに対し、宗臺秀明は横大路周辺遺跡で出土した手づくねかわらけについて、京都の分類に対照させて比較検討している。とくに器形・口縁部のナデ・面取りなどの調整技法に着目し分類を行った上で、鎌倉においては初期に京都の影響下で手づくねかわらけの製作され、その後遅れて平泉の影響が現れている結論づけた〔宗臺秀明 1996・1998〕。

平泉では鎌倉にやや遅れて1990年頃から本格的に大規模な発掘調査がはじまり、資料が蓄積される中で、京都系手づくねかわらけの系譜に着目されるようになった。とくに鎌倉に先行して都市化し、京都と政治的・文化的に密接なつながりをもつ平泉においては、かわらけの製作者（工人）についてもさまざまな検討がなされた。

松本健速は平泉出土のかわらけを形態・口縁部整形技法による属性（ナデ・形状・面取り有無など）・法量などにより分類し、平安京近郊出土のかわらけと詳細に比較を行っている。とくに個人の「クセ」に着目し、原型となる京都の型を導き出し平泉型のモデル化を行った。その結果、平泉の手づくねかわらけの製作者は、平安京近郊から直接移住してきたと結論づけた〔松本1995・1998〕。

八重樫忠郎は、当初「計画的組織的な工人の移動」を想定していたが〔八重樫1999〕、その後の資料の蓄積、最近の鎌倉における出土資料を参考に「工人の移動はない」と考え、「少数の京都産かわらけを見本として在地のロクロ工人が製作した」という見解を示している〔八重樫2014〕。また飯村均は「初期に工人が移動して生産を開始した後、独自の型式変化を遂げた可能性があり、恒常的に京都との情報交換や工人の移動があって生産が継続されとするには疑問がある」と述べ、工人の大規模な移動には否定的な考えを示している〔飯村2009〕。井上雅孝は志羅山遺跡出土の精巧な手づくねかわらけ〔志羅山遺跡35次調査出土 平泉町教育委員会1995〕を例に挙げて、「在地のロクロ工人が〈情報〉のみで精巧なかわらけを製作することは困難である」とし、また手づくねかわらけ導入前後のロクロかわらけの器形変化からも、「導入期には工人の技術指導があった」が、「積極的に大量生産に関わることはなく、多くは在地の工人が製作した」という見解を示している〔井上2010〕。平泉においては、ヒト・モノ・情報の差はあるものの、京都からの直接的な影響は大方の認めるところであるが、その関与の大小については異論も分かれるといえよう。

なお、葦山の京都系手づくねかわらけについては、筆者が葦山のかわらけ編年を提示する中で、その出現・消滅の時期、ロクロ成形かわらけへの影響などについてふれたが〔池谷2008〕、技術的な比較・製作者等については言及していない。ただし、京都系かわらけの胎土が在地産かわらけと共通するものであり、ロクロ・手づくね成形かわらけともに、同じ製作者集団によるものである可能性を指摘している⁽¹⁾。

いっぽう、中井淳史は生産地である京都からの視点で、東国の京都系かわらけの詳細な分析・検討を行っている〔中井1998・2003〕。中井は京都系かわらけ（中井は京都系土師器皿とするが、煩雑を避けるため京都系かわらけと記述する）の模倣のあり方について以下の3つのモデルを提示する。

ケースⅠ：地方の土師器工人が京都の技術を伝習し、再び地方に戻り、地元の粘土を用いて京都系土師器皿生産を開始する。あるいは、地方に下った京都の工人から技術指導を受けて、生産をおこなう。

ケースⅡ：京都の土師器工人が地方に下り、そこで地元の粘土を用いて生産を行う。

ケースⅢ：京都産土師器皿の製品がモデルとして入手されるか、あるいは京都産土師器皿についての視覚的、言語的情報を入手して、地方の土師器工人がそれを規範に生産をおこなう。

このモデルに対する判断の材料となる属性としては、(1) 胎土、(2) 色調、(3) 器形（口径、器

高や器壁の厚さを含めた)、(4)成形技法、(5)整形技法(具体的にはナデ調整)の5つをあげ、平泉・鎌倉・葦山の京都系かわらけを分析した上で、いずれの地域もケースⅢと結論づけた。つまり、京都から工人が下向し地方でかわらけ生産の行った可能性はなく、生産の中心となっていたのは在地の製作者であり、また、地域間での模倣や影響関係についても否定的な考えを示した。

②……………分析対象の遺構

本稿では、平泉・鎌倉・葦山の4遺跡7基の井戸および井戸状遺構に廃棄された京都系かわらけを含む一括資料を対象に分析を行う。井戸の一括資料は厳密な意味での同時期資料とはいえないが、出土状況を考慮して抽出することにより、ある程度の時間幅をもつものの時期を限定した一括性が確保でき、量的な傾向も含め、ある一定期間の製作者の特徴を導き出すことが可能と考える。

平泉

志羅山遺跡第69次 1号井戸状遺構(図1 平泉町教育委員会1998)

大型のかわらけ廃棄遺構で、深さ3.84mの井戸状を呈す。平面形は東西3.02m・南北3.04mのほぼ円形を呈す。遺物は主に上層で大量に出土している。かわらけは約301Kg出土し、大部分が手づくね成形かわらけである。その他、貿易陶磁白磁碗・皿、常滑産片口鉢、瓦器碗、木製品などが出土している。年代は12世紀後半(第4四半期)である。報告書に掲載されたかわらけのうち、手づくね成形の大皿158点、小皿160点について観察・検討した。

柳之御所遺跡第52次 52SE8井戸状遺構(図1 岩手県教育委員会2001)

平面形が2.1×2.0mの楕円形を呈す遺構で、深さは3.8mである。下層から大量のかわらけが一括廃棄の状態で検出されている。出土したかわらけの総重量は約84Kgである。その他、貿易陶磁白磁壺、常滑・渥美産甕・片口鉢・山茶碗等が出土している。また、年輪年代測定による9層から出土した折敷の年代は「1186年伐採」という結果がある。これらのことから、本遺構の年代は12世紀後半(第4四半期)であり、1189年の藤原氏滅亡に近い年代に位置づけられている。報告書に掲載されたかわらけのうち、手づくね成形の大皿137点、小皿63点について観察・検討した。

鎌倉

大倉幕府周辺遺跡(二階堂字荏柄38番⁽²⁾)

大倉幕府推定地の東側に位置する遺跡で、古代の溝や12～13世紀の井戸・区画溝などが検出されている。このうち、かわらけが一定量出土した以下の3基の井戸について検討を行った。

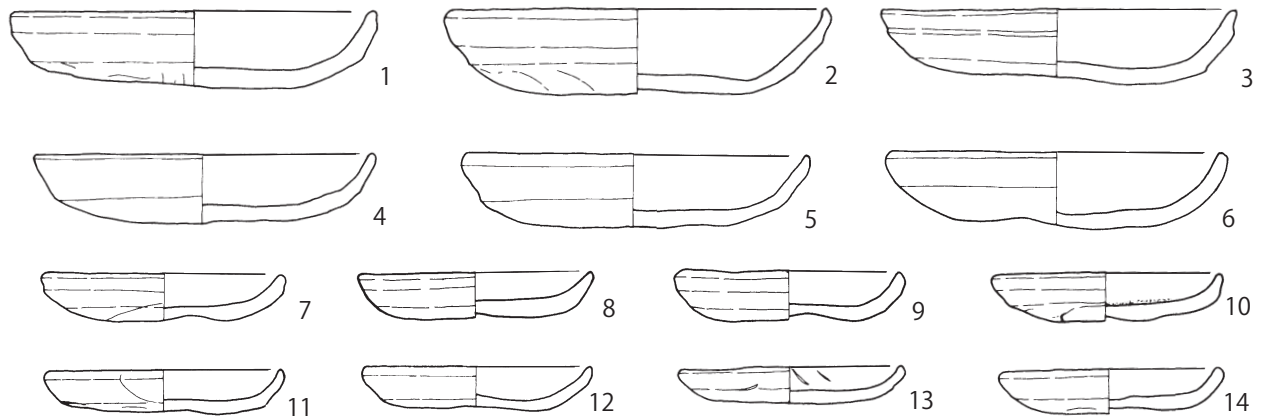
遺構769(図2)

素掘りの円形井戸で、覆土からまとまって遺物が出土している。重量計算から想定されるかわらけの総个体数は約100個体で、ロクロ成形かわらけと手づくね成形かわらけの比率はおおよそ2:3で手づくねかわらけが多い。共伴遺物は、貿易陶磁白磁水注・四耳壺、青磁同安窯系碗・龍泉窯

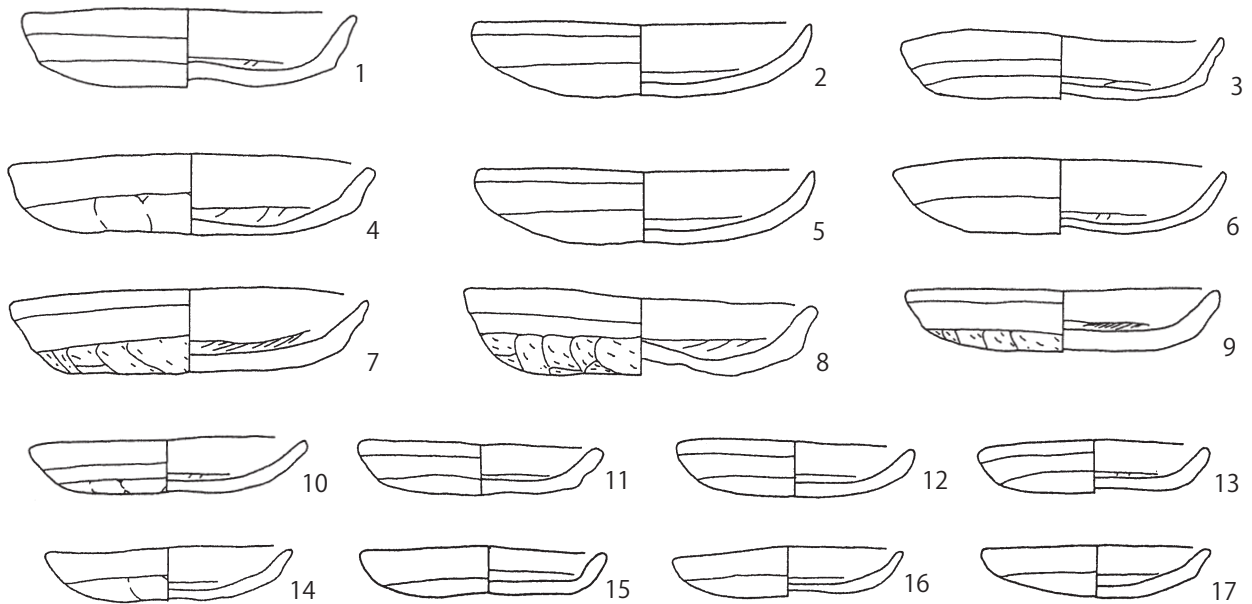
系割花文碗，青白皿・小壺，常滑甕（3 型式），渥美の甕（2a 型式）などがある。年代は 12 世紀第 4 四半期に位置づけられる。観察・検討したかわらけは，手づくね成形の大皿 5 点，小皿 17 点である。

遺構 5573（図 2）

方形の井戸で，木杵は確認されていない。重量計算から想定されるかわらけの総個体数は約 300 個体で，手づくね成形かわらけが 9 割を占める。共伴遺物は常滑甕（2・3 型式）・片口鉢（4・5 型式）がある。共伴遺物が少ないが，遺構 769 と遺構 5244 のかわらけの比較から，年代は 13 世紀第 1 四半期から第 2 四半期前半に位置づけられる。観察・検討したかわらけは，手づくね成形の大皿 22 点，



志羅山遺跡第 69 次 1 号井戸状遺構



柳之御所遺跡第 52 次 52SE8 井戸状遺構

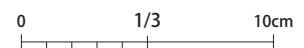
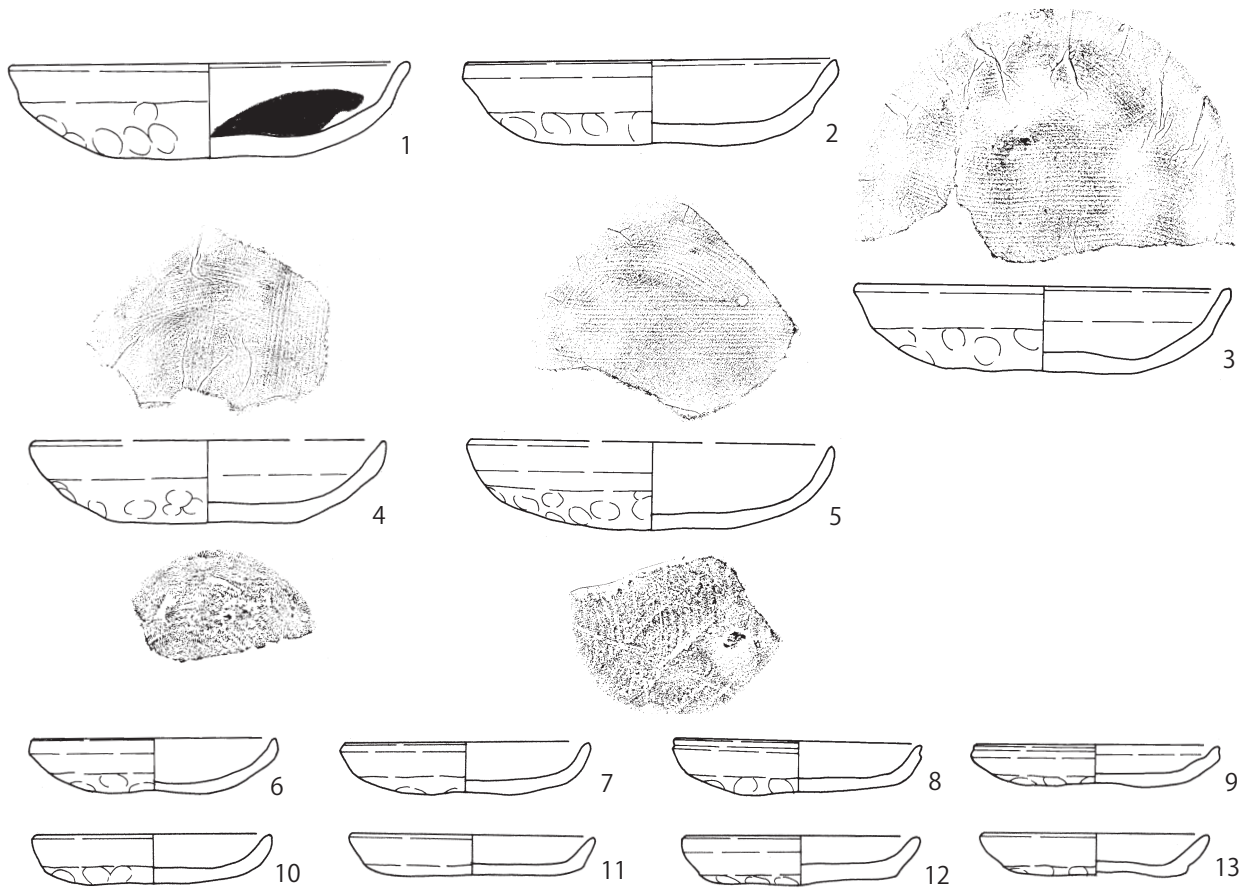
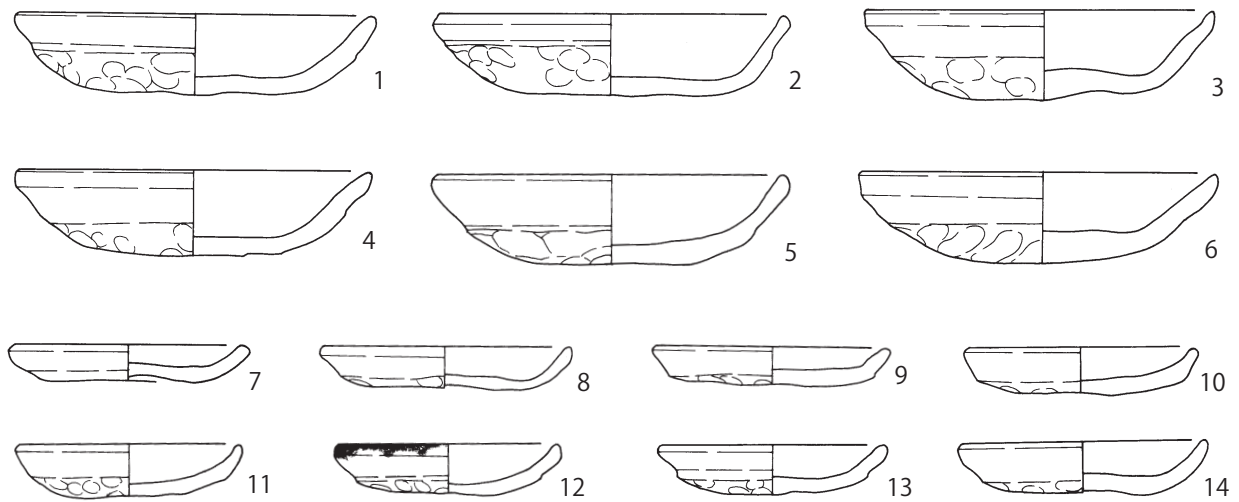


図 1 平泉の京都系かわらけ



大倉幕府周辺遺跡 遺構 769(井戸)



大倉幕府周辺遺跡 遺構 5573(井戸)

0 1/3 10cm

図2 鎌倉の京都系かわらけ①

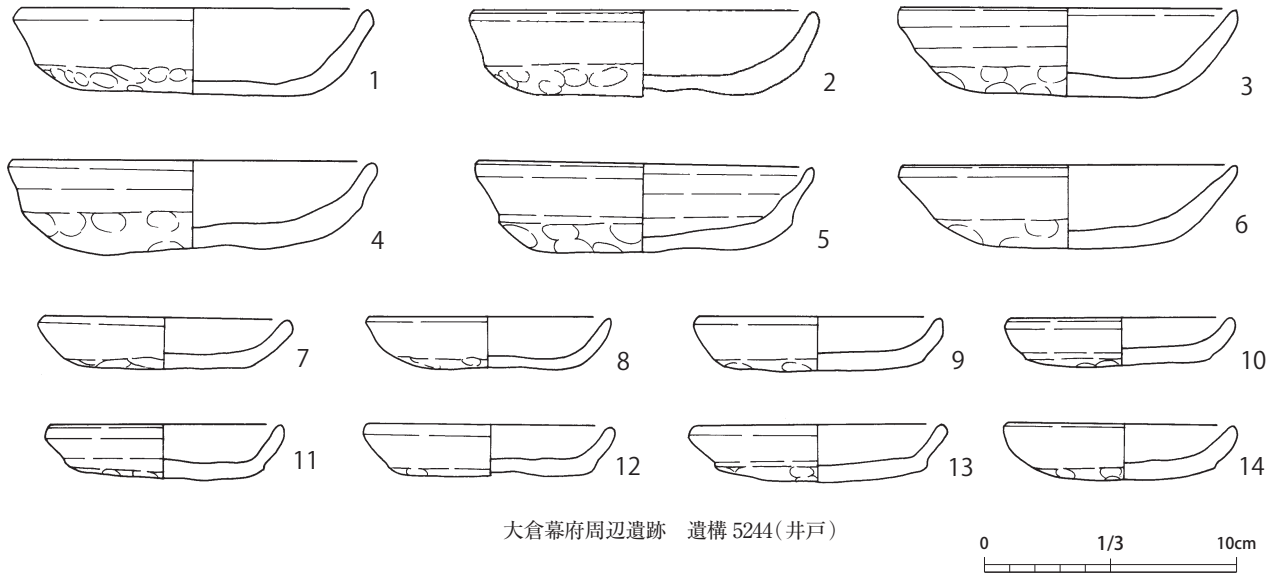


図3 鎌倉の京都系かわらけ②

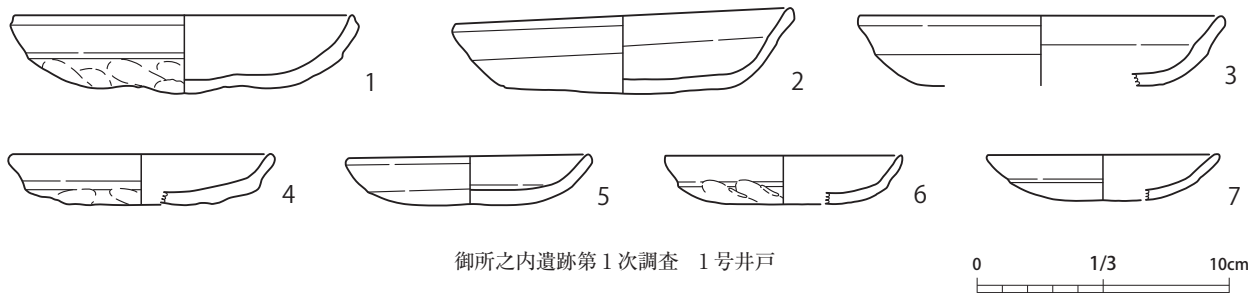
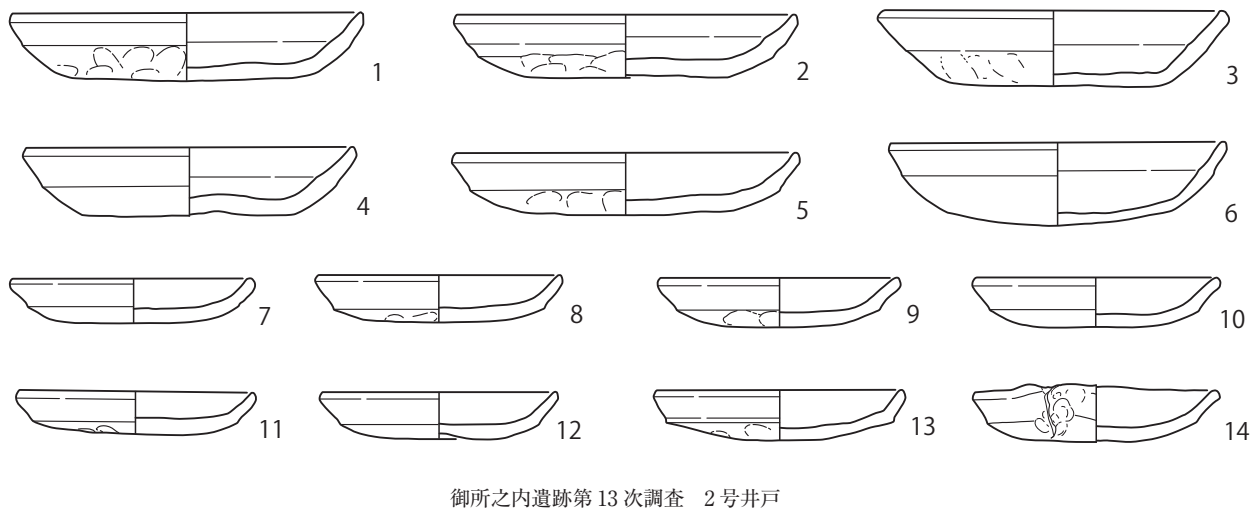


図4 葦山の京都系かわらけ

小皿 72 点である。

遺構 5244 (図 3)

フラスコ状の断面形態の井戸で、中層から遺物が集中して出土している。重量計算から想定されるかわらの総個体数は約 480 個体で、手づくね成形かわらが 85% を占める。共伴遺物は貿易陶磁白磁碗・四耳壺、龍泉窯系蓮弁文碗、青白磁合子、常滑甕 (4 ～ 6a 型式)・片口鉢 (5 ～ 6a 型式)、渥美片口鉢 (2b 型式)、尾張山茶碗 (6 型式)、渥美山茶碗 (3a 型式)、瓦器、平瓦、滑石製鍋などがある。年代は 13 世紀第 2 四半期に位置づけられる。観察・検討したかわらは、手づくね成形の大皿 40 点、小皿 92 点である。

葦山

御所之内遺跡は伊豆の国市 (旧葦山町) に所在し、独立丘である守山山麓から狩野川の自然堤防上に形成されている。鎌倉北条氏の本拠地、北条氏所縁の尼寺、室町時代の公方の館である堀越御所の複合遺跡である。現在、遺跡内に「史跡北条氏邸跡 (円成寺跡)」、「史跡伝堀越御所跡」の 2 つの国指定史跡があり、今回分析した第 13 次調査 2 号井戸は「史跡北条氏邸跡 (円成寺跡)」内、第 1 次 1 号井戸は「史跡伝堀越御所跡」内で検出された。いずれも完掘した井戸ではないため、出土遺物の総量等は明らかではない。

御所之内遺跡第 13 次調査 2 号井戸 (図 4 葦山町教育委員会 2002)

1 辺 1.5 m の木枠井戸で、掘り方は径 4.9 m、深さは 4.2 m である。調査の途中で崩壊したため規模等の詳細は不明である。貿易陶磁白磁碗、青磁碗が出土している。年代は 12 世紀末～13 世紀前半と考えられる。

御所之内遺跡第 1 次調査 1 号井戸 (図 4 葦山町教育委員会 1985)

予備調査トレンチのコーナー部で一部を検出した遺構で、底面に隅柱の下部が残存していたことから木枠井戸と思われる。常滑産甕、渥美産片口鉢が出土しており、年代は 12 世紀末～13 世紀前半と考えられる。

③……………東国の京都系かわらの成・整形技法の特徴

(1) 京都産かわらの特徴

まず、東国の京都系かわらけとの比較のために、以下の中井淳史の提示した京都産かわらけの技法と展開過程を押さえておくこととする (図 5・6) [中井 2003]。

- ・京都産土師器は中世を通じて手づくねで成形される。主体となるのは帯状の粘土をまきあげて皿形に成形刷る方法であると思われる。
- ・内面から口縁部外面に至る範囲をナデ調整するのであるが、まず見込み (底部内面) を全面一

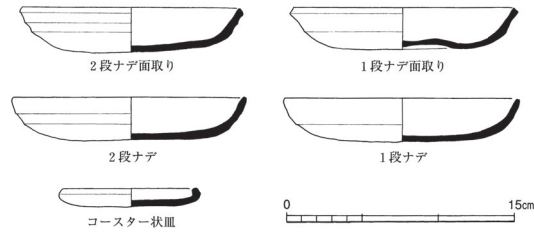


図5 京都産かわらけの口縁部形態模式図(中井 2003 より)

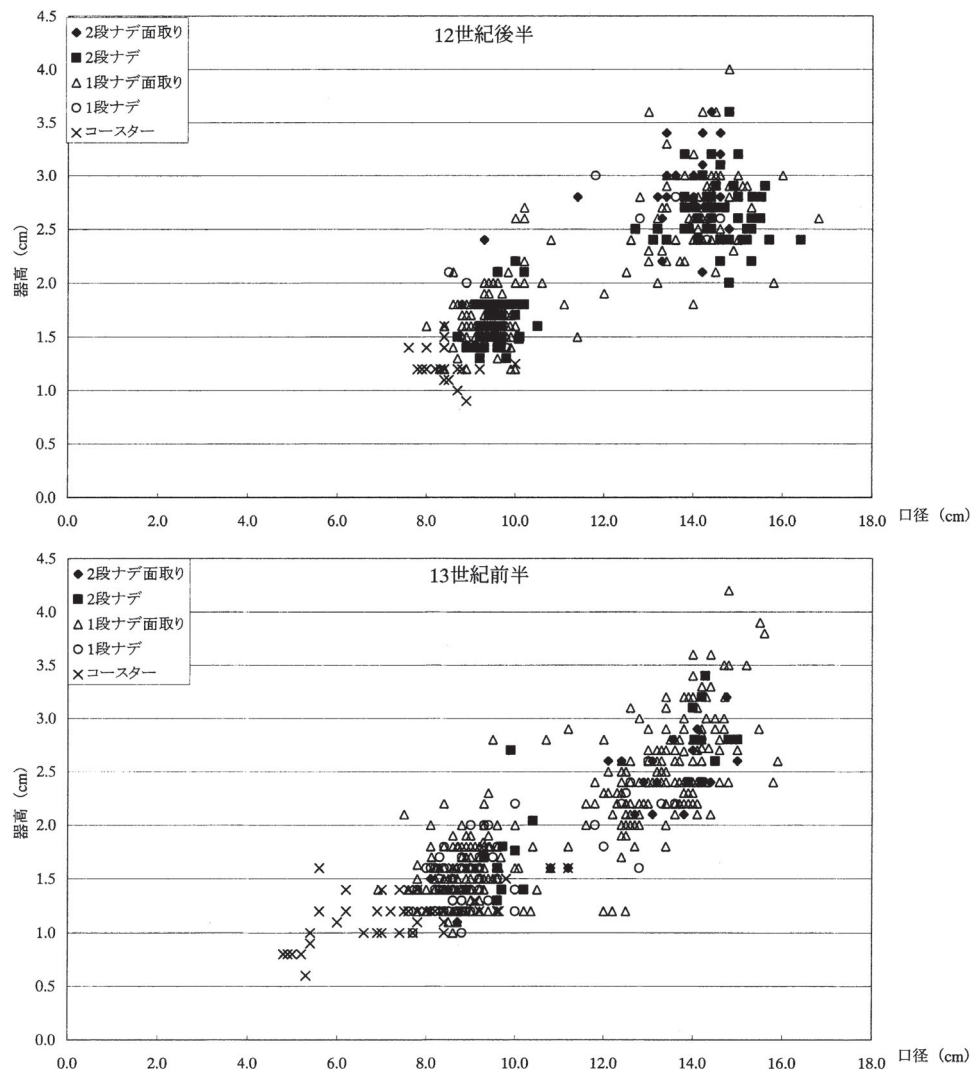


図6 京都産かわらけ法量分布(中井 2003 より)

方向にナデたのち（一方向ナデ）、体部内面から口縁部外面を右回りにナデる方法（ヨコナデ）が採用されている。この方法は生産の場においてきびしく遵守されていたようで、逸脱した資料はほとんど皆無といってよいほどみあたらない。

・口縁部形態が以下の 4 種

- 1) 2 段ナデののちに、口縁端部を面取りするもの（2 段ナデ面取り）
- 2) 2 段ナデのみのもの（2 段ナデ）
- 3) 1 段ナデののちに、口縁端部を面取りするもの（1 段ナデ面取り）
- 4) 1 段ナデのみのもの（1 段ナデ）

・12 世紀後半には 4 種類すべてみられるが、13 世紀になると 3)・4) が主体となり、さらに 14 世紀以降になって、4) のみというあり方へ変化する。

・12 世紀後半段階は 9.0 ～ 10.0cm と 14.0cm 前後にピークがあるが、漸次縮小していく傾向がみられ、13 世紀後半には 9.0cm, 13.0cm 前後へ至る。

・大皿は器高の縮小化が著しい。12 世紀後半には 2.5cm ～ 3.0cm に分布の中心があるが、13 世紀代には 2.0 ～ 2.5cm へとその値を減じてゆく。

・口縁部形態と法量分布のあいだには、特別な相関関係はみいだしがたい。

以上の京都系かわらけの特徴にもとづいて、法量・口縁部のナデ調整・底部内面（見込み）の調整・底部の板状圧痕など成・整形技法の傾向を比較検討していく。

(2) 京都系かわらけの法量(図 7)

平泉・鎌倉・葦山の各遺構出土京都系かわらけの口径・器高をグラフ化して、図 7 に示した。全体的に口径が縮小し器高が高くなっている傾向がみえる。以下、口径の変化を遺構ごとにみていくこととする。

平泉の志羅山遺跡第 69 次 1 号井戸状遺構の大皿の口径平均値は 14.4cm, 小皿は 9.4cm である。柳之御所遺跡第 52 次 52SE8 井戸状遺構の大皿の口径平均値は 13.4cm, 小皿は 9.0cm である。2 遺構はともに 12 世紀第 4 四半期に位置づけられるが、前述のように柳之御所遺跡第 52 次 52SE8 井戸状遺構は平泉における京都系かわらけの最終段階に、志羅山遺跡第 69 次 1 号井戸状遺構はその前段階とされている。⁽³⁾ 短期間で大皿の口径平均値が 1.0cm 縮小しており、法量変化が大きいことが認められる。また、平泉において初期段階の京都系かわらけといわれる 12 世紀第 3 四半期の志羅山遺跡 35 次調査出土かわらけは口径平均値 15.8cm であり、それらと比較するとさらに 1.4 ～ 2.4cm 縮小していることがわかる [平泉町教育委員会 1995]。

鎌倉の大倉幕府周辺遺跡では、遺構 769 の大皿の口径平均値は 15.1cm, 小皿は 9.7cm, 遺構 5573 の大皿の口径平均値は 14.4cm, 小皿は 9.4cm, 遺構 5244 の大皿の口径平均値は 14.4cm, 小皿は 9.4cm である。小皿の平均値はほとんど変わらないが、大皿の平均値は、12 世紀末の遺構 769 と 13 世紀代の遺構 5573・5244 とでは、縮小化が進んでいる。

葦山の御所之内遺跡第 13 次 2 号井戸の大皿の口径平均値は 13.6cm, 小皿は 9.7cm である。御所之内遺跡第 1 次 1 号井戸は小破片が多く数値に若干の問題はあるが、大皿の口径平均値は 14.0cm, 小皿は 10.2cm である。

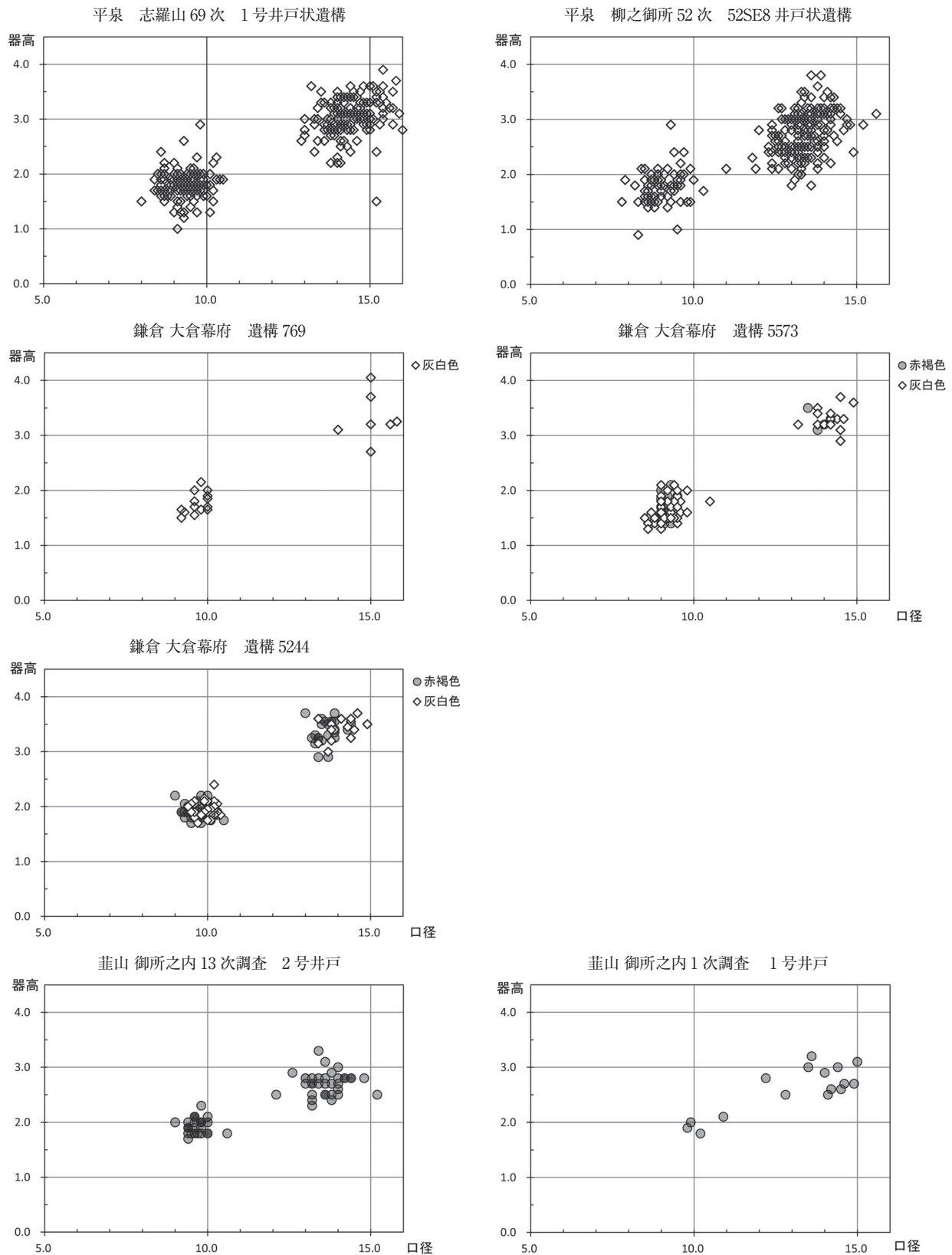


図7 京都系かわらけ法量分布

以上のように、平泉・鎌倉ともに新しい段階に向かって口径の縮小傾向が明らかである。ただし、ほぼ同時期と考えられる柳之御所遺跡第52次52SE8井戸状遺構と、大倉幕府周辺遺跡遺構769の口径平均値に1.7cmの差が認められ、さらに12世紀後半の京都系かわらけの大皿の口径平均値が14.0cmであることから、必ずしも同時期の京都系かわらけの大きさを踏襲しているとは考えられない。おそらく、京都系かわらけの導入期は口径15cm前後を基準とし、次第に地域ごとに縮小していくものとする。なお、葦山では口径15cm程度の大皿のまとまった出土例はなく、今回の2遺構⁽⁴⁾の資料を初現期の京都系かわらけに位置づけるには若干問題を残す。

(3) 口縁部ナデ調整 (表1)

口縁部のナデについては、ナデの段数と方向について検討した。

平泉の志羅山遺跡第69次1号井戸状遺構では、観察した大皿158点のうち74点、小皿は160点のうち23点に2段ナデが認められた。その他は1段ナデか摩耗等により観察ができなかったものである。柳之御所遺跡第52次52SE8号井戸状遺構では、観察した大皿137点のうち42点、小皿は63点のうち9点に2段ナデが認められた。志羅山遺跡の大皿が約47%を占めるのに対し、柳之御所遺跡は31%、小皿は、それぞれ約14%であった。いずれにしても、大皿の方に2段ナデが多い傾向がみえる。

これに対して、鎌倉大倉幕府周辺遺跡や葦山御所之内遺跡では、明確な2段ナデを確認することはできなかった。大倉幕府周辺遺跡の遺構769の小皿の中に2段ナデ風に調整したものが認められたが、平泉の2段ナデとは異っており、偶然の可能性も否定できない。

口縁部ナデの方向については、葦山の京都系かわらけに左回りのものが特徴的にみられるとの中井淳史の指摘がある〔中井 2003〕。改めて葦山の資料を見直すとともに、平泉・鎌倉の京都系かわ

表1 京都系かわらけの調整数量

遺跡名	大・小	数量	口縁部ナデ				見込み調整			板状圧痕	
			2段ナデ	右回り	左回り	不明	布	ササラ	不明	あり	不明
志羅山遺跡 第69次1号井戸状遺構	大	158	74	78	0	80	97	35	26	99	59
	小	160	23	72	0	88	105	11	44	66	94
柳之御所遺跡 52次52SE8	大	137	42	69	0	78	66	41	30	97	40
	小	63	9	25	0	38	28	8	27	32	31
大倉幕府周辺遺跡 遺構769	大	7	0	5	0	0	2	5	0	2	5
	小	17	2	14	0	3	14	0	2	5	12
大倉幕府周辺遺跡 遺構5573	大	22	0	10	2	10	21	1	0	4	18
	小	72	0	47	1	24	72	0	0	5	67
大倉幕府周辺遺跡 遺構5244	大	40	0	31	0	9	40	0	0	20	20
	小	92	0	69	0	23	92	0	0	6	86
御所之内遺跡 第13次2号井戸	大	35	0	4	3	28	10	20	5	3	32
	小	30	0	5	11	14	24	5	1	0	30
御所之内遺跡 第1次1号井戸	大	12	0	1	0	11	3	8	1	1	11
	小	5	0	1	0	4	3	1	1	1	4

らけについて実見した。

今回観察した平泉の2遺構の資料の中には、左回りのものはなく、半数の不明（観察不可）を除くと、すべてが右回りであった。鎌倉大倉幕府周辺遺跡では、遺構 5573 の中に左回りのものが3点確認されたが、他の資料数に比べると非常に少量であり、例外的なケースの可能性が高い。

いっぽう、葦山においては、御所之内遺跡第13次2号井戸のなかで大皿3点、小皿11点に左回りが認められた。御所之内遺跡第1次1号井戸では、破片が小さいため、ナデ方向を確認できるものが少なく、右回りが大小それぞれ1点ずつ確認できるとどまり、左回りは確認できなかった。なお、今回は資料化しなかったが、他の御所之内遺跡の調査次出土かわらけにおいても、左回りのナデ調整をみることができ、中井の指摘するように、口縁部の左回転ナデは、葦山の特徴である可能性が高い。

以上のように、口縁部のナデ調整については、平泉では2段ナデが一定量みられ、また時期が新しくなるにしたがい減少していく傾向が認められた。これは12世紀後半の京都産かわらけと同じ傾向であり、この点においては、京都の技法とその変化が踏襲されているとみることができる。いっぽうで、鎌倉では12世紀末においても、2段ナデが本格的に行われなかったとみてよい。

また、葦山の左回りの口縁部ナデ調整は、京都産かわらけからみれば異質な調整といえよう。これは単純な方向の違いにとどまらず、調整の方法や手順で大きな違いがあったと想像される。

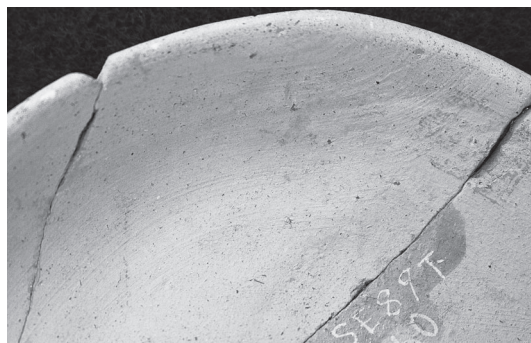
(4) 底部内面(見込み)の調整

前項の中井のまとめでみるように、底部内面（見込み部）に1方向のナデを施し、その後口縁部内外面を右回りにナデ調整を行うのが京都産かわらけの基本である。東国においては、底部内面に布目状の細かいナデ痕跡の他に、通称ササラ状工具と呼ばれる木口かハケ状の工具を用いた目の粗い痕跡がたびたび見られる。実際の工具がどのようなものであったかは不明であるが、ここではササラ状工具として記述する⁽⁵⁾。

平泉の志羅山遺跡第69次1号井戸状遺構の大皿は、布状の調整97点、ササラ状工具による調整35点が確認できた。小皿は布状の調整105点、ササラ状工具による調整11点であった。磨滅により不明なものを除くと、布と木口状工具の比は大皿は約3:1、小皿は10:1である。柳之御所遺跡第52次52SE8井戸状遺構の大皿は、布状の調整66点、ササラ状工具による調整41点が確認できた。小皿は布状の調整28点、ササラ状工具による調整8点であった。磨滅により不明なものを除いた場合、布と木口状工具の比は大皿は約3:2、小皿は約4:1である。

鎌倉の大倉幕府周辺遺跡遺構769では、ササラ状工具による調整が大皿で5点確認できた。葦山御所之内遺跡でも、第13次2号井戸で大皿20点、第1次1号井戸で大皿8点がササラ状工具による調整で、布状の調整を上まわっている。

以上のように、京都ではほとんどみられないササラ状工具によるナデ調整は、東国においては各地に存在することが明らかとなった。とくに、鎌倉においては古い段階の遺構769にのみ認められ、13世紀代の遺構5573では1点だけで、この段階ではササラ状工具のよる調整は行われていないとみてよいと考える。ササラ状工具による調整は、東国においては12世紀代に行われた調整法とも考えられる。



柳之御所 52SE8 口縁部右回りナデ裏



大倉幕府周辺遺跡遺構 5244 口縁部右回りナデ表



御所之内遺跡 2号井戸 口縁部左回りナデ裏



御所之内遺跡 2号井戸 口縁部左回りナデ表



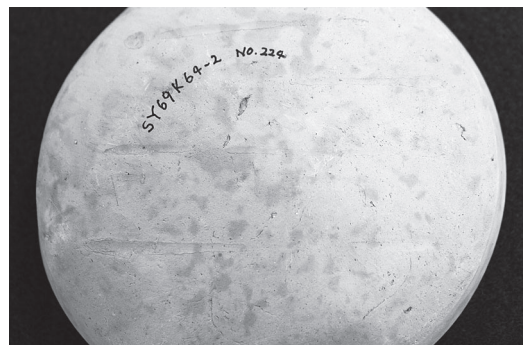
大倉幕府周辺遺跡遺構 769 ササラ状工具調整



志羅山遺跡 1号井戸 ササラ状工具調整



柳之御所 52SE8 板状圧痕



志羅山遺跡 1号井戸 板状圧痕

写真 京都系かわらけの調整痕

なお、大倉幕府周辺遺跡遺構 769 には、ロクロ成形かわらけの底部内面にササラ状工具による調整が施される例がある(図 2-4・5)。これらは手づくね成形かわらけとほぼ同じ浅い皿状の器形で、底部内面に多方向のササラ状工具によるナデ調整が念入りに行われている。また、底部には回転糸切り痕が残るが、ナデ調整により一部を消している状況も見られた。調整技法では、京都系かわらけととらえることができ、表 1 では数量に含めている。

(5) 底部の板状圧痕

底部の板状圧痕はロクロ成形かわらけで多くみられるもので、成・整形後のかわらけを乾燥させる際に残る痕跡といわれている。

平泉の志羅山遺跡第 69 次 1 号井戸状遺構では、観察した大皿 158 点のうち 99 点、小皿は 160 点のうち 66 点に底部外面に板状圧痕が認められた。大皿は約 60%、小皿は約 40%である。柳之御所遺跡第 52 次 52SE8 号井戸状遺構では、観察した大皿 137 点のうち 97 点、小皿は 63 点のうち 32 点に板状圧痕があり、大皿は約 70%、小皿は約 50%を占める。

鎌倉の大倉幕府周辺遺跡では、遺構 769 の大皿では 7 点のうち 2 点に、小皿は 17 点のうち 5 点に板状圧痕が認められた。遺構 5573 では大皿 22 点のうち 4 点、小皿は 72 点のうち 5 点に底部外面にあり、遺構 5244 では大皿 40 点のうち 20 点、小皿は 92 点のうち 6 点に底部外面に板状圧痕が認められた。小皿よりも大皿に板状圧痕が残る割合が多い傾向がある。

葦山御所之内遺跡第 13 次 2 号井戸においては、大皿 35 点のうち 3 点に板状圧痕が認められたが、小皿にはなかった。御所之内遺跡第 1 次 1 号井戸においては、大皿・小皿ともに 1 点のみに板状圧痕が認められた。

底部外面に板状圧痕のみられる例は、平泉と鎌倉で多く、とくに柳之御所遺跡 52SE8 では、大皿の 7 割にも及ぶ。もともと底部の板状圧痕は、ロクロ成形かわらけで多くみられるもので、平泉・鎌倉ともに同時期のロクロ成形かわらけには板状圧痕が残る、共有した特徴と考えられる。いっぽう葦山では、ロクロ成形かわらけに板状圧痕のみられるのは 13 世紀前葉以降であり、12 世紀後半から 13 世紀初頭では、ロクロ・手づくねかわらけともに板状圧痕は極端に少ない。京都産かわらけに板状圧痕のみられる例はほとんどなく、板状圧痕の残る手づくね成形かわらけは、従来のロクロ成形かわらけの手順もしくは製作場のあり方が応用されたものとも考えられる。

(6) その他の特徴

最後に、客観的な分類や数値化が困難なため、今回表には示さなかった器壁の厚みや胎土について、ふれておきたい。

東国の京都系かわらけは、いずれの地域も古い段階では薄手に作られている。もっとも京都のものに比べれば厚いものであるが、ロクロ成形かわらけの器壁と比べると薄いことは歴然である。しかし、時期が下がるにしたがい次第に厚手化が進み、13 世紀代になると、ロクロ成形かわらけとほぼ同じ厚みとなる。当初は薄手につくることにより、京都産かわらけを再現しようとする意図があったが、次第にその意識が薄れたとも考えられる。

また、平泉では、ロクロ成形かわらけと手づくね成形かわらけの胎土は、明確に区別されている

が、最終段階の柳之御所遺跡 52SE8 には、ロクロ成形かわらけの胎土でつくった手づくね成形かわらけがあらわれる（図 1-7～9）。製作者あるいは製作の場の一部で混在する状況が起こった可能性が考えられる。鎌倉では平泉ほど明確ではないものの、初期段階ではロクロ成形かわらけと手づくね成形かわらけの胎土の区別がみられるが、13 世紀代の遺構 5244 ではそれらが混在した状況となる。

色調の面からみると、鎌倉においてはロクロ成形かわらけ・手づくね成形かわらけともに、12 世紀代の古い段階のものほど灰白～乳白色を呈すものが多く、新しい段階になるにしたがい赤～橙褐色のものが増加する。13 世紀中葉段階では、いずれのかわらけもほぼ赤～橙褐色で統一される。韭山もほぼ同じ傾向である。鉄分の多いローム質の粘土を材料とする関東～伊豆地域においては、通常の焼成では褐色に発色するのが自然であり、灰白～乳白色を出すのは窯や焼成方法の工夫を必要としたであろう。これも京都産かわらけの白い色を意識したものと考えられる。

まとめにかえて

東国における京都系かわらけの導入は、これまでくりかえし述べられているように〔飯村 2009・藤原 1997・八重樫 2014〕、京都で行われていた大量のかわらけを使用する宴会儀礼を武家儀礼に応用したものであり、そのために京都風のかわらけが必要とされたと考えられる。また、宴会に大量に使用、廃棄されるかわらけは「かりそめの器」〔鈴木 2002〕であり、そこに完成された技法は求められず、あくまでも京都風のイメージが具現化されればよかったのであろう。そのため、系統的な技術の伝播・伝承は行われていなかったと考えられる。本稿で明らかにした各地の成・整形技法の違いは、在地の土器製作者が見聞きした京都産かわらけの技法に学びつつも、これまでの製作方法を応用して模倣形を製作したものとみえる。

また、ロクロ成形かわらけと手づくね成形かわらけの製作者あるいは製作の場が明確に分かれていた平泉、ある程度は分業されていたながらも 13 世紀代には混在した鎌倉、分業はなく同一の製作者によった韭山など、製作者についても各地で違いが認められた。

今回は京都系かわらけにみられる成・整形技法の痕跡等を地域ごとにみることにより、その導入のあり方を比較検討した。東国のかわらけについては、ロクロ成形かわらけを含め出土量の多寡や廃棄状況など、使われ方も大きな課題である。この点については、飯村均が東北の状況を分析し、古代から中世に至る用途・機能を論じている〔飯村 2015〕。今後はこのような視点も加えながら、かわらけの製作・使用・廃棄の実態を通じて東国の武家社会の一側面を明らかにしていきたい。

本稿を執筆するにあたり、以下の方々にご教示・ご協力いただいた。記して感謝申し上げる。
浅野春樹、飯村 均、及川 司、及川真紀、加藤千尋、齋木秀雄、菅原計二、戸根貴之、中野晴久、降矢順子、松吉里永子、村松彩美、八重樫忠郎

註

- (1)——2012年10月14日「鎌倉草創のかわらけ検討会」(主催 鎌倉遺跡調査会, 於 鎌倉商工会議所), 2015年2月21日「鎌倉かわらけ検討会」(主催 鎌倉かわらけ研究会, 於 鎌倉商工会議所)
- (2)——2011年～2012年に鎌倉遺跡調査会により発掘調査が行われた。未報告の資料であるが, 調査担当組織および調査担当者のご厚意により, 資料分析・実測図掲載の許可をいただいた。分析した遺物については, 有志で遺物観察および公開の検討会を開き, 年代や系譜についての分析・検討を行った(鎌倉遺跡調査会2012および2015年2月21日検討会 鎌倉かわらけ研究会2016)。今回の報告はそれらの成果に基づいている。調整等の詳細については池谷が追加観察を行った。
- (3)——井上2009, および八重樫忠郎氏のご教示による。
- (4)——たとえば, 口径15cmかわらけの存在を予想する八重樫忠郎の指摘などがある[八重樫2014]。ただし, 池谷が編年案で示したように[池谷2008], 京都系かわらけ導入以前のロクロ成形のみの一括資料が確認されているいっぽうで, その間に入る京都系かわらけは現在のところ見出せていない。御所之内遺跡第1次1号井戸の資料の中に, 口径の大きなものが含まれ, その可能性も考えられるが, 一括資料として充分ではなく, 今後の課題としておきたい。
- (5)——古代の土師器甕などに見られる所謂ハケ調整に近いものであるが, 1単位の幅は2～3mmのものから5mm程度のものまで, さまざまである。
- (6)——中井氏のご教示によれば, 京都中心部では東国にみられるようなササラ状工具による調整はほとんどなく, 周辺部の宇治市や神戸市の福原京関連遺跡においてハケ状工具による調整がみられるとのことである。

参考文献

- 飯村 均 2009「平泉から鎌倉へ」『中世奥羽のムラとマチ 考古学が描く列島史』東京大学出版会 初出は生活文化研究所1997『財団法人サントリー文化財団1996年度研究助成報告書 宴をめぐる日本文化の歴史的総合研究』
- 飯村 均 2015「東国のかわらけ」『中世奥羽の考古学』高志書院 初出は『中近世土器の基礎研究』XⅢ 1998 日本中世土器研究会
- 池谷初恵 2008「伊豆地域におけるかわらけの変遷とその背景」『地域の文化と考古学』Ⅱ 六一書房
- 伊野近富 1998「中世前期の京都系土師器皿の伝播と受容」『中近世土器の基礎研究』XⅢ 日本中世土器研究会
- 井上雅孝 2009『奥州平泉から出土する土器の編年の研究—12世紀代における中世土器様式の成立と展開—平泉出土土器年代基準資料集成編』
- 井上雅孝 2010「平泉かわらけの系譜と成立」『兵たちの生活文化』(兵たちの時代Ⅱ) 高志書院
- 岩手県教育委員会 2001『平泉遺跡群発掘調査報告書 柳之御所—第52次発掘調査概報』
- 鎌倉遺跡調査会 2012『鎌倉草創のかわらけ検討会資料』
- 鎌倉かわらけ研究会 2016『鎌倉かわらけの再検討』科学研究費補助金「平泉研究の資料学的再構築」
- 河野真知郎 1986「鎌倉における中世土器様相」『神奈川考古』第21号 神奈川考古同人
- 小森俊寛・上原憲章 1996「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『京都市埋蔵文化財研究所研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 齋木秀雄 1983「出土かわらけの編年について」『研修道場用地発掘調査報告書』研修道場用地発掘調査団
- 齋木秀雄 2012「大倉幕府周辺遺跡の調査概要」『鎌倉草創のかわらけ検討会資料』鎌倉遺跡調査会
- 宗臺秀明 1996「かわらけの年代と編年」『横小路周辺遺跡—二階堂字横小路110番3地点』横小路周辺遺跡発掘調査団
- 宗臺秀明 1998「中世都市鎌倉の初期かわらけ」『中近世土器の基礎研究』XⅢ 日本中世土器研究会
- 鋤柄俊夫 1994「平安京出土土器の諸問題」『平安京出土土器の研究』古代学協會
- 鈴木康之 2002「中世土器の象徴性—「かりそめ」の器としてのかわらけ」『日本考古学』14 日本考古学協会
- 中井淳史 1998「＜京都らしさ＞のある風景—「京都系土師器皿」概念の再検討」『中近世土器の基礎研究』XⅢ 日本中世土器研究会
- 中井淳史 2003「平泉・鎌倉・葦山—中世初期の土師器生産に関する二、三の素描—」『中世諸職』シンポジウム中世諸職実行委員会

-
- 日本中世土器研究会 1998『中近世土器の基礎研究』XⅢ
韮山町教育委員会 1985『御所之内遺跡発掘調査報告書 予備調査～第3次調査』
韮山町教育委員会 2002『史跡北条氏邸跡発掘調査報告書Ⅰ—御所之内遺跡第13次発掘調査報告—』
服部実喜 1985「鎌倉旧市域出土の中世土師質土器—所謂かわらけの編年を中心に—」『中近世土器の基礎研究』Ⅰ
日本中世土器研究会
平泉町教育委員会 1995『志羅山遺跡第35次発掘調査報告書』平泉町文化財調査報告書第51集
平泉町教育委員会 1998『志羅山遺跡第69・71次発掘調査報告書』平泉町文化財調査報告書第71集
藤原良章 1997「中世の食器—〈かわらけ〉ノート」『中世的思惟とその社会』吉川弘文館 初出は1988『列島の文化史』5 日本エディタースクール出版部
松本建速 1994「手づくねかわらけからみた個の解釈—柳之御所跡出土手づくねかわらけの製作者のくせとそれから派生する諸解釈」『紀要XⅣ』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
松本建速 1995「平泉のかわらけと平安京のかわらけの比較」『紀要XⅤ』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
松本建速 1998「12世紀代東北地方におけるかわらけ存在の意味」『中近世土器の基礎研究』XⅢ 日本中世土器研究会
馬淵和雄 1998『鎌倉大仏の中世史』新人物往来社
八重樫忠郎 1999「平泉のかわらけの問題点」『中世北陸の石文化Ⅰ』北陸中世考古学研究会
八重樫忠郎 2014「平泉と鎌倉の手づくねかわらけ」『中世人の軌跡を歩く』高志書院
横小路周辺遺跡発掘調査団 1996『横小路周辺遺跡—二階堂字横小路110番3地点』

(伊豆の国市教育委員会・国立歴史民俗博物館研究協力者)

(2016年4月2日受付, 2017年7月31日審査終了)

Introduction and Transformation of Advanced Technology : A Case Study of Unglazed Kyoto-style Earthenware Produced in Eastern Japan at the Beginning of the Medieval Period

IKEYA Hatsue

This article examines unglazed earthenware produced in provincial areas in the 12th and 13th centuries by drawing inspiration from earthenware produced in Kyoto (referred to as “unglazed Kyoto-style earthenware”) from the perspective of forming and shaping techniques to analyze the introduction and transformation of unglazed Kyoto-style earthenware in eastern Japan. This analysis is conducted on collections of unglazed Kyoto-style earthenware and other objects unearthed from four sites and seven wells or their structural remains in Hiraizumi, Kamakura, and Nirayama to identify distinct forming and shaping techniques and categorize them by location. Then, these characteristics are examined from a quantitative point of view to determine similarities and differences and compared with Kyoto’s forming and shaping techniques.

The results indicate that each of the regions developed some techniques different from those of Kyoto. This analysis also reveals differences in forming and shaping techniques between the regions. It is unlikely that the forming and shaping techniques were systematically transferred from Kyoto to eastern Japan when unglazed Kyoto-style earthenware was introduced to the latter. Rather, local potters seem to have adapted their own production techniques to imitate unglazed earthenware made in Kyoto while observing the techniques of Kyoto’s unglazed earthenware artisans.

Key words: unglazed Kyoto-style earthenware, Kyoto, eastern Japan, technique, transfer, Samurai ritual